審査の結果の要旨

氏名　箕輪潤子

保育所や幼稚園等に設置されている砂場は,幼児の育ちにとって重要な保育環境である。幼児は砂という素材や砂場という空間の性質を生かして遊びを展開している。本論文は,園の砂場で幼児同士が砂や砂場とどのように関わり,遊びを展開しているのかの特徴と過程を学年や期の違いに関し検討した論文である。全 4 部 8 章から構成されている。

第Ⅰ部第 1 章では, 砂遊びや砂場研究の先行研究を概括し,砂場での遊びの固有性を捉えるために, Garvey(1977)のごっこ遊びの分析枠組みと「共同注意」の視点から幼児同士の相互作用を分析することが述べられ,第 2 章では,そのための方法が論じられている。

第Ⅱ部第 3 章では, 3,4,5 歳児幼児 78 名のうち砂場で遊ぶ幼児を対象に参与観察からの記録 22 事例を分析し,砂を集めたり砂で形を構成したりする「砂での遊び」と,枠で囲まれた空間や構成したものを使う「場（地面・空間）での遊び」があることを示し,「プラン」や「役割」に関してごっこ遊びとの違いを明らかにしている。また第 4 章では, 砂に関わる行為 8 事例から,3 歳児は「入れる」「形を抜く」,4 歳児は「入れる」以外に「振る」「混ぜる」「つぶす」等が,5 歳児は,粒子を細かく「分ける」など砂の質感を変える行為等の学年差がみられることを示した。続く第 5 章では,「地面に構成する（山作り・穴掘り）」遊び 17 事例から,3 歳児は「掘る」「積む」行為を,4 歳児は「掘る」「積む-固める」中で,道具の使い分けや操作の工夫をする行為を,5 歳児は,「掘る」「積む-固める」等の行為を組み合わせ,穴を掘ると同時に山に砂を積むなど,学年間の差異を見出している。

第Ⅲ部では,全国 24 園の砂場を対象に,第 6 章では砂場の空間における幼児の身体の位置や向きの分析から,全ての年齢・時期に共通して,砂場の端や枠の近くを拠点として幼児同士は横に並ぶか向かい合うことが多く,また視線の分析から,低学年に比べ高学年幼児は,他児の行為や表情から意図を読み取ろうとし,言葉で過程のイメージを共有していることを明らかにしている。また第 7 章では, 「地面に構成する」遊びに焦点を当て,砂場の空間における幼児の身体の位置や向きは,学年・時期に関係なく共通しており,穴が 1 つまたは近い場合は向かい合い横に並ぶ傾向があり,水路や道などを水平に掘る場合は,水路が長くなるよう個々に自分で掘る場所を移動し,掘りやすい方向に身体を向けていること,またその期による変化を示している。そして最後に第Ⅳ部第 8 章総合考察では,研究知見を総括し,縦断的検討の必要性や理論的な分析枠組の検討などに関する今後の課題を論じている。

本論文は,砂場に特化した精緻な観察と厚い事例記述の分析により,砂場固有の幼児の遊びや関わりの特徴を明らかにした点で独創性が高く,保育や幼児教育分野に寄与すると共に,砂という素材を仲介とする協働的相互行為の発生過程への視座を拓く可能性も有する研究であり,教育実践にも大きな寄与をするものと高く評価できる。よって,本論文は,博士（教育学）の学位を授与するに十分にふさわしい水準にあると判断された。